

アラブを名乗る二つの国，今昔そして明日へ エジプトからの便り



JICA 専門家，エジプト投資・フリーゾーン庁投資促進アドバイザー 村上 惣一

『ナイルの水を飲んだものは，再びナイルへ戻る』このような諺があります。記憶にないのですがやはり飲んでいたのでしょう，初めてアラブ，エジプトの地を訪問したのは1993年でしたのでちょうど30年。



いつも悠然と流れるナイル川と渋滞で何車線にもなる道路



4500年以上も変わらないピラミッドと開館が近い？
GEM（大エジプト博物館）

アラブ首長国連邦（ドバイ）とエジプト・アラブ共和国（カイロ）です。当時，電気機器メーカー欧米向け商品の輸出営業を担当していた私は，“次なる市場のターゲットは？”

という事で“新興工業経済地域 - NICs (NIEs)”の担当に手を挙げました。ターゲットとして、韓国や中国、東南アジア諸国がメインであったのは当時日本に住んでいた私からすれば自然だったのでしょう。

しかし、出張で降り立ったのはドバイ国際空港、深夜便での到着、入国審査ロビーはやたらと薄暗く、“VISAコレクション！”と叫び乗客を誘導する得体の知れない係員っぽい人達に揉まれながら長蛇の列に並んでやっと入国したのです…

そして到着ロビーに着いてみると、今度は真っ白、真っ黒の民族衣装（カンドゥーラ、アバヤ）の出迎えの人波。とにかくひたすら違和感を持ったことだけが記憶にあります。

数日後には、同質な違和感のままエジプトのカイロに滞在したのです。

正直、エジプトのイメージと言えば、人生で一度は訪れてみたいピラミッド、スフィンクス（だけ）でした。それだけを見れば目的達成と言う気持ち、いや下心があったのかもしれない。

ピラミッドは、人里離れた砂漠にあると思っていたところ、市街地にとっても近く驚いた記憶があります。

これぞナイルの賜物と言われるゆえんです。

当時の私の感覚では、ドバイもカイロもどちらも自分の好みには合わないネガティブなイメージを持って帰国したのです。

時は流れて、2011年アラブの春ではエジプトやアラブ諸国で民主化の波が起りましたが、うまく乗り切った国、今も内戦からグダグダ状態な国々など様々です。エジプトは政治的混乱と経済的な苦境に見舞われながらもそれを跳ね返しながらか、残った残った！で土俵際で踏ん張る横綱と言った形容がぴったりかもしれません。

これぞ神の思し召しだったのか、私は、2011年12月からの9年間を電気機器メーカー中近東・アフリカ統括拠点長としての赴任（ドバイ）となったのです。以来、ドバイから幾度に渡ってのエジプト訪問をすることとなりました。そして、これまた神の思し召しなのか昨年5月からの現職でのエジプト赴任となり、アラブを名乗る二つの国に住民票をおくことになり、その国々の趨勢・推移を体感しています。読者の皆さんも思われるような差異があるのはお分かりいただけるかと思えます。

1993年当時、私には同じ様なイメージだった両国が、30年の月日をへて経済的な差が大きくなってしまったのは事実ですが、地政学的要衝に位置するエジプトは、エジプトビジョン2030達成に向けて2016年からの野心的な経済改革に取り組んでおり、残った残っ

た！の土俵際からの横綱相撲が楽しみなのも事実です。

エジプトへのFDI（外国直接投資）

現在進行中の経済改革において、コロナ禍やロシアのウクライナ侵攻によるどちらかと言えば外的要因からの外貨準備高問題、それによる輸入規制、インフレ、通貨安などに直面したエジプト、但し、かつて2016年にIMF支援を受けたときに比べてみれば、厳しい経済環境下の現在でもインフラ工事は進行しており、まさに市場は動いている事を感じます。個人的にはかつてより耐性が出来て足腰が強くなったという感じを受けています。

これからの大消費市場として期待のかかるエジプト、欧米、アフリカ等との貿易協定等により、生産や物流のハブ拠点としての産業構造の変革が起こりつつあり、多くの外国からの投資が入ってきています。その筆頭は、アラブ繋がりであるUAE（アラブ首長国連邦）、全体の18%近くを占めるほどの大きさで、ざっくり括ってみると、全体の3割が湾岸を中心としたアラブ諸国、3割が欧州、1割がアメリカとなり、日本からの投資は前年度比で大きく増加ではあるものの、全体に占める割合は増える余地満載です。

エジプトの国・地域別対内直接投資<国際収支ベース、インフロー>

(単位：100万ドル，%)

	対内直接投資			
	2020年	2021年		
	金額	金額	構成比	伸び率
アラブ首長国連邦	1,551	2,616	17.7	68.7
イタリア	2,463	1,860	12.6	△ 24.5
英国	1,877	1,701	11.5	△ 9.4
米国	1,504	1,526	10.3	1.5
オランダ	1,495	1,372	9.3	△ 8.2
ドイツ	201	525	3.5	160.7
カタール	641	501	3.4	△ 21.7
クウェート	292	471	3.2	61.1
中国	302	427	2.9	41.1
フランス	255	376	2.5	47.4
日本	5	34	0.2	580.0
EU	5,403	4,743	32.1	△ 12.2
アラブ諸国	3,462	4,452	30.1	28.6
流入計(その他含む)	13,742	14,790	100	7.6

[出所] エジプト中央銀行

* 日系企業でも日本国外からの投資の場合は日本に含まれません

メガプロジェクト満載です

積極的な外国からの投資の下でメガプロジェクトとして都市開発が進行中，その筆頭はなんと言っても NAC（新行政首都）でしょう。およそ，東京23区やシンガポール一国の広さと言えば分かりやすい広大さです。既に毎週の閣議などもそこで行われるなどしており急ピッチ開発が進んでいます。

同様に地中海沿岸のリゾート地ほか各地で開発は進んでおり目が離せません。



新行政首都のビジネス街周辺



地中海沿岸のニューアラメインシティの開発風景

三大外貨獲得手段

巷でよく言われる，三大〇〇，観光産業はその筆頭，コロナ禍で大きく落ち込んだものの既に立ち直りを見せつつあり，直近では14兆円（現在のレート）超と新聞でのニュース記事になっていました。

次に，エジプト人の人口の1割弱が海外で生活してその資金を本国へ送金していると言われます。

4～5兆円に上るほどの額のようにです。

そして，スエズ運河の通行料，全世界の物流の8%がスエズを通過するという物量ですのでかなりの額に上り，これは今や1兆円近くとされています。

これらの数値もポジティブな動きをしている事は明るい未来を感じさせてくれる気がします。



カイロ市内では観光客がスーツケース持って大移動の光景



スエズ運河を行き交う船舶を見ながらのマンゴジュースは最高です

熱烈 JAPAN 愛を感じます

仕事関係以外でも、街中やメトロ駅、ウーバー乗車の際にエジプト人と話す（私はアラビア語さっぱりです）機会がありますが、日本人だと分かるとこちらの人たちは、日本の事を素晴らしく褒めてくれます。

過去からの日本の国際協力等の成果の賜物なのかもしれませんが、オペラハウス、医療、地下鉄、ダム灌漑、初等教育から大学と言った高等教育までの多くの支援は着実にエジプト人のハートを捕まえていると思います。鉄は熱いうちに打て！ではありませんがコミュニケーションができるうちにできる人と繋がっておくことこそが将来の日本にとっても有益なことになると思います。冒頭写真の大エジプト博物館も日本からの支援でもうすぐ開館（もうすぐだと信じています！）、建屋の建設だけでなく展示しきれないほどのアイテムの管理等あらゆるところでの日本の支援は歴史に刻まれるものと思います。

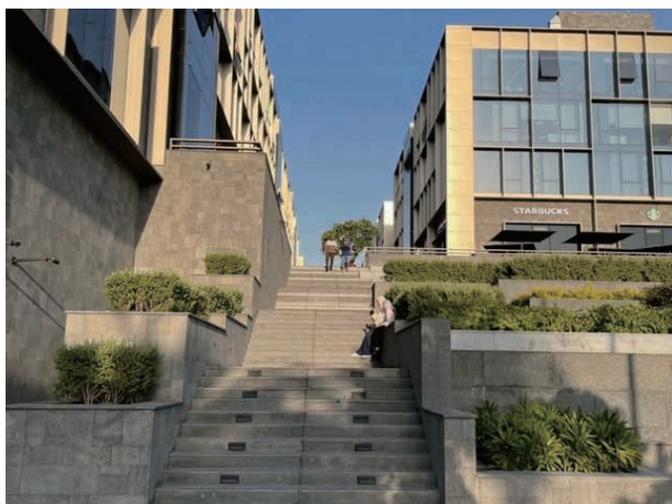


E-JUST（エジプト日本科学技術大学）キャンパス正門と校内

まとめ

30年前に初めて訪問したアラブを名乗る二つの国、都市に住んで実感しているのは、日本で流行ったものがドバイで、そしてドバイで流行っているものがエジプトで流行るという図式が出来ているのではないかという事です。

昔ながらの光景のカイロで通勤しつつ、週末にゴルフやショッピングモール内散歩をしていると、アレ？ドバイに戻って来たのかな？と直感的に感じてしまうのです。



カイロの東隣にあるニューカイロ, ここに来るとガチのエジプトを感じることはなくなってしまいます

エジプト・投資のためのご案内もご覧いただければ幸甚です。

<https://www.jccme.or.jp/pdf/202303/0316-investment-in-egypt.pdf>

*本稿は、個人的な見解を表明したものであり、筆者の所属する組織の見解を示すものではありません。(写真はすべて筆者撮影)